

令和 5 年 6 月 3 日現在

機関番号：84604

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2022

課題番号：17K03087

研究課題名（和文）呪符木簡の時代的地域的特質からみた「木に文字を記す文化」の史的考究

研究課題名（英文）A Historical consideration on "The culture of writing letters on wood" seen from the historical, regional characteristics of wooden documents on which an incantation for magical purposes was written

研究代表者

山本 崇 (Yamamoto, Takashi)

独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所・都城発掘調査部・室長

研究者番号：00359449

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、呪符木簡の集成を手がかりとして、「木に文字を記す文化」の日本の特質を明らかにすることを目的としている。

本研究の成果は、『呪符木簡集成（稿）』を編集刊行して示した。本書は、1000点を超える広義の呪符木簡の釈文を網羅的に収集する資料集である。解説「呪符掌故」を著し、日本における木簡初発段階から登場する呪符の歴史的展開と、呪符木簡の分類案を示し、呪符木簡研究の基礎的な素材を提供した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究において作成した『呪符木簡集成（稿）』は、宗教や祈りに関わる広義の呪符木簡を網羅的に収集した資料集で、1000点を超える資料の釈文（木簡に記された文字）を一覧することができた。平安時代後半以降の呪符には、定型化した表現がみられるものも多く、類例の蓄積は、かつて読めなかった文字をあらたに解読する手がかりとなりうる。日本の呪符木簡を内容別に網羅した資料集が完成したことで、既存釈文の再検討や、新出土資料の効率的な解読に資するであろう。

研究成果の概要（英文）：This study considers the Japanese-style characteristic of "The culture of writing letters on wood". The clue is collection of wooden documents on which an incantation for magical purposes was written (jufu mokkan), as a clue. Research results are published "Corpus of texts on wooden documents on which an incantation for magical purposes was written (jufu mokkan) from Japan". This book is a collection of documents which collected jufu mokkan more than 1,000 points comprehensive. I wrote a short paper about historical development and classification of jufu mokkan, and presented basic research materials for jufu mokkan.

研究分野：日本古代史

キーワード：木簡 出土文字資料 符ろく 物忌 蘇民将来 急急如律令 日本史

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 研究代表者は、これまで全国の木簡出土情報の収集を担うとともに、7世紀を中心とした令前の文書木簡、平安時代木簡の集成をはじめ、鳥取県、愛知県静岡県、兵庫県北部(但馬)などの地域を対象とした古代木簡集成にも取り組んでおり、これらの作業を通じて、木簡の時代的地域的特質を解明してきた。また、中世近世木簡12万3千点余の8割以上が、文書や荷札ではない「その他」に分類される木簡であることをふまえ、「木に文字を記す文化」として木簡をとらえ直すことが必要と考えていた。このためには、列島に木簡が登場する最初期から中世近世まで連続と用いられた木簡の事例を研究対象とする必要があった。

(2) 呪符木簡は、大阪市桑津遺跡にみられるように7世紀前半からすでに確認され、藤原宮期から奈良時代にかけても独自の発展をとげる。平安時代後期以降、鎌倉・室町時代をピークとして定型化しつつその使用範囲をより拡大させていく。江戸時代には、紙の呪符も多くみられるが、なお、木製のものが使い続けられていた。その記載は、古代には具体的な内容が記される傾向があるものの、時代が降るとともに定型化する傾向が認められる。律令制度の整備とともに登場した荷札木簡や、文書行政のなかで生じた削屑など、いわば古代に特徴的ともいえる木簡と比べ、呪符木簡は、時代を通じて存在し、木簡の利用方法にかかわる時代的特質の検討には最適な素材と考え、本研究を開始した。

2. 研究の目的

本申請研究は、次の諸点を課題として設定した。

(1) 呪符木簡の集成

(2) 呪符木簡の内容分類

(3) 符ろくの画像収集と分類、呪符および符ろくの伝播過程の解明。

呪符木簡は、広く何らかの信仰に基づいて作成された木簡と定義する。この中には、卒塔婆、位牌・御札、こけら経など多彩な木簡が含まれる。研究期間には、広義の呪符も調査対象としてつづ史料を収集した。一例を挙げれば、こけら経の出土点数は、11万6千点を超える大量なものであった。

3. 研究の方法

(1) 呪符木簡の全体的把握

研究期間終了時の2023年3月現在で、全国出土木簡は、1,650ヶ所以上の遺跡から、48万2千点以上に及んでいる。ここから、広義の呪符に含まれる木簡を抽出した。最終的に、梵字や「南無阿弥陀仏」など同様の文言が記される卒塔婆・笹塔婆の類、さらに経文が記されるこけら経は、集成として煩雑になるため掲載を見合わせた結果、1,097点の呪符木簡積文を示すこととなった。

呪符木簡の収集にあたり、木簡研究において通常用いている発掘調査報告書、雑誌『木簡研究』(年刊。現在45冊)、自治体史を参照した。加えて、いわゆる仏教民俗資料として調査研究の対象とされ、木簡としては認知されてこなかった資料についても収集、調査の対象に加え、伝世品、出土品の別を慎重に吟味しつつ、木簡の要件(出土資料であること)を満たすものは集成に加えることとした。

(2) 積文の再検討

本務である飛鳥・藤原地域出土木簡の調査研究、奈良文化財研究所が外部機関と共同で実施する連携研究、外部機関からの依頼による木簡調査など様々な機会において、呪符木簡を調査する機会を積極的に見だし、かつて提示されている積文の再検討をおこなった。藤原宮跡西半部、愛知県静岡県内遺跡、但馬地域、山口県などの呪符を対象としたが、積文を公表する主体は所蔵機関にあるため、所蔵機関などによりすでに再積読成果が公表されたものに限り掲載した。

(3) 探訪調査による呪符木簡および符ろくの画像収集と検討

呪符として掲載した木簡の約4分の1にあたる、272点の木簡に符ろくが記されていることを確認した。符ろくの記された木簡をすべてについて高精細赤外線撮影を計画し、画像による分析を試みる予定であった。

しかしながら、符ろくの整理を終え調査対象を選定した令和元年度末から、新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の流行により探訪調査を自粛することとなり、再開の目処がたたず計画を一部変更する仕儀となった。

4. 研究成果

(1) 本申請研究の最大の成果は、本研究の当初の最終年度であった2020年末までに出土が公表された呪符木簡1097点を集成した資料集『呪符木簡集成(稿)』を編集刊行したことである。この資料集は、呪符木簡を、7世紀、奈良時代、平安時代以降に大別し、とくに定型化の傾向がみられる平安時代以降については、内容分類に従い排列することで、同一の経文や類似する事例が近接して掲載されており、類例の検索に便なるよう努めた。

(2) 解説原稿「呪符掌攷」を著し、定型化の傾向がある平安時代以降の呪符を、未定型の呪符のほか、物忌、蘇民将来、天コウ、急々如律令・符籙、巻数、転読札・護摩札、巡礼札、仏教などに分類して説明した。また九九・数字は、必ずしも呪符と断じられる訳ではないが、呪符の断片である可能性に鑑みて集成の対象としたほか、呪符の周縁に位置しており、広く信仰にかかわる木簡（墨書木製品）として、斎串・形代・絵馬・絵画について関説し、項目ごとに主要な研究文献目録を作成した。

(3) 呪符の伝播について、得られた見通しを摘記する。

列島最古の呪符は、7世紀前半に遡る可能性が指摘され、7世紀半ば頃以降断続的に宮が営まれた難波の地で出土している。天武朝から藤原宮期にかけて飛鳥藤原地域でも確認されるようになる。符ろくと急々如律令を記す呪符は、早くも藤原宮期に登場している。出現期の呪符はおおむね宮都の地に限られており、「まじない」もしくは「のろい」に関わる呪符は、都からはじまったと判断できる。地方遺跡における呪符の登場は、都城からやや遅れ、7世紀末頃に東国で確認される。呪符の地方社会への伝播を考える、一つの手がかりとなろう。

奈良時代には、呪符は定型化の兆しをみせるとともに、なお多様な姿を残すものもある。地方への呪符の展開は、さらに進む。従来鎌倉時代以降とされてきた「咄」呪符は、奈良時代の但馬にさかのぼることが判明し、「今日難物忌」と記した木簡は、「難」字の類例に乏しいものの「堅固物忌」あるいは「固物忌」と同義と理解され、物忌札がその軽重とともに確認できる事例である。奈良時代の但馬への集中は、あらためてその要因を探る必要があるが、長岡宮期から平安時代へと継続していく定型化した呪符が、すでに奈良時代の段階に少なくとも畿内近国に伝播していたことを示す事例として貴重であろう。

(4) 提示した呪符の内容分類にしたがい、顕著な特徴や得られた成果の一部を摘記する。

蘇民将来は、長岡京跡から出土した小札が最古の資料である。現在各地の社寺に残る蘇民将来木札は、長崎県壱岐市の事例を除き、兵庫県神戸市祇園神社を西限とし、青森県までに分布しているという（川上元・倉澤正幸「全国各地の蘇民将来符一覧」上田市立信濃国分寺資料館編『蘇民将来符 その信仰と伝承』1989年）。出土事例は、鳥取市と山口県防府市を除き、畿内以東に広く分布していることから、強い相関関係がうかがわれる。とりわけ新潟県は現在の信仰も出土資料も集中する傾向にある。また、角柱状の蘇民将来符は、現在信濃国分寺で授与される六角柱のものがよく知られているが、出土事例も隣県の群馬県・栃木県と埼玉県に限られており、戦国期（以降）の領国支配と関わると予想される。なお、もっとも古い蘇民将来説話が伝わる備後国（現在の広島県の東部）に蘇民将来札がみられない点は興味深い。

巻数は、読誦した經典などの名目と度数を記した文書で、中世以降、願主に報告を兼ねて届けられる巻数とともに、功德と神仏に祈願したことを示す転読札が作成された。古代の巻数は、金光明最勝王経転読や、罹災にともなうものなど、個別事情の検討が求められるが、鎌倉時代の事例は、日付の判明するものはすべて正月で、うち二点が正月八日であることから、正月仏事との深い関わりが認められる。

仏教などとして概括した木簡には、『仏母大孔雀明王経』巻上（大正新脩大蔵経第十九巻）の一節、「一切日皆善、一切宿皆賢、諸仏皆威徳、羅漢皆断漏、以斯誠実言、願我常吉祥」や、『小叢林清規』巻中（大正新脩大蔵経第八十一巻）の一節、「迷故三界城、悟故十方空、本来無東西、何処有南北」（真言宗・禅宗で定められた葬式儀礼において、棺天蓋に記す偈）を記したものなどが複数出土していることを確認した。木簡研究が本格的にはじまった1970年代から80年代にかけての頃は、類例に乏しく、釈読できなかったものもあったが、類例の増加により、既存の写真や実測図を手がかりにするだけでも、読みを進められる木簡も散見する。『呪符木簡集成（稿）』が、今後の釈読の現場で活用されることを望む。

(5) 研究期間終了にあたり、直近の課題をあげる。かつて、呪符は、「人びとの究極の意思を、（神仏に対して）記したもの」として、文書木簡に分類すべきであると指摘したことがある（山本「まじないの意味を探る」奈良文化財研究所編『木簡 古代からの便り』岩波書店、2020年）。本科研を通じて、呪符を文書に読み替える分類案のみでは不十分であり、機能に注目した分類が必要であることにあらためて気づかされた。また、本集成作業により、ともかくも呪符木簡の収集と大まかな分類はなしえたといえ、符籙の追究とともに未定型とした多彩な呪符の内容理解を深めることが肝要である。その上で、『まじない秘伝』、『邪呪呪禁法則』、『呪咀調法記』など、近世のまじないの書との接点を模索しつつ、呪符木簡の理解をさらに進めることがさらなる課題と認識している。

(6) なお、本研究の申請、計画段階においては、探訪調査による悉皆的な画像収集を企図したため、全国各地の木簡所蔵機関のご担当者に研究計画を提示し、調査への協力を依頼していた。しかしながら、時節柄探訪調査を自粛することとなり、遺憾ながらも当初の目的を一部完遂できなかった。かかる状況をふまえ、報告末尾の研究協力者は、実際に調査に同行し、あるいは遺物の検討に加わっていただいた方に限り、承諾をえて掲載させていただくこととした。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計33件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 14件）

1. 著者名 藤間温子・山本崇	4. 巻 2022
2. 論文標題 飛鳥池遺跡出土削屑の再積読 第84次ほか	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 奈良文化財研究所紀要2022	6. 最初と最後の頁 127 - 131
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 山藤正敏・山本崇	4. 巻 2022
2. 論文標題 石神遺跡SD1347A出土の土器群・木簡 石神遺跡第14・15次	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 奈良文化財研究所紀要2022	6. 最初と最後の頁 117 - 126
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 柳成焜・山本崇（共著）	4. 巻 2021
2. 論文標題 出土文字資料解読の試み Image Processing Softwareを用いて	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 奈良文化財研究所紀要2021	6. 最初と最後の頁 48 - 49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 山本崇（単著）	4. 巻 759
2. 論文標題 総論 7世紀の木簡	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 考古学ジャーナル	6. 最初と最後の頁 3 - 5
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山本崇・藤井裕之（共著）	4. 巻 759
2. 論文標題 7世紀木簡の樹種 研究現状の整理のために	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 考古学ジャーナル	6. 最初と最後の頁 18 - 21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山本崇・田村朋美（共著）	4. 巻 84
2. 論文標題 奈文研ギャラリー(76)ー木で削り出された釘の様 レプリカ作成の効能	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 奈文研ニュース	6. 最初と最後の頁 4 - 5
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 山本崇（単著）	4. 巻 121-11
2. 論文標題 いわゆる音義木簡とその依拠原典 律令国家成立期の經典将来をめぐって	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 國學院雑誌	6. 最初と最後の頁 362 - 378
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 山本崇	4. 巻 1
2. 論文標題 参河三嶋蕡荷札の年代	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 奈文研論叢	6. 最初と最後の頁 1 - 26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 山本崇	4. 巻 87
2. 論文標題 霊異記「伝未詳」僧考	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 古文書研究	6. 最初と最後の頁 129 - 134
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山本崇・星野安治	4. 巻 2019
2. 論文標題 藤原宮木簡の樹種3	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 奈良文化財研究所紀要2019	6. 最初と最後の頁 93 - 94
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 山本崇・藤間温子(共編)	4. 巻 第2分冊
2. 論文標題 愛知県・静岡県関係古代木簡集成(稿)	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 東海の地方官衙と木簡 伊場木簡の再評価を中心に、木簡学会静岡特別研究集会資料集	6. 最初と最後の頁 1-159
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山本崇ほか4名(1番目)	4. 巻 2017
2. 論文標題 豊橋市普門寺所蔵僧永意起請の文化財科学的調査	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 奈良文化財研究所紀要2017	6. 最初と最後の頁 50 - 51
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 山本崇・前岡孝彰（共著）	4. 巻 12
2. 論文標題 漆紙文書の追加報告	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 豊岡市立歴史博物館『豊岡市立歴史博物館 館報（平成28年度）』	6. 最初と最後の頁 37 - 38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 4件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 山本崇
2. 発表標題 参河三嶋鬘荷札の年代
3. 学会等名 日本史研究会古代史部会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 山本崇
2. 発表標題 2019年全国出土の木簡
3. 学会等名 木簡学会第41回研究集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 山本崇
2. 発表標題 日本霊異記の大安寺説話を読む 第3回 日日本霊異記の中の大安寺 大安寺僧の活動
3. 学会等名 大安寺歴史講座Ver. 8（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 山本崇
2. 発表標題 日本靈異記の大安寺説話を讀む 第2回 日本靈異記の中の大安寺 大安寺の信仰
3. 学会等名 大安寺歴史講座Ver. 8 (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 山本崇
2. 発表標題 日本靈異記の大安寺説話を讀む 第1回 大安寺と日本靈異記 史料としての靈異記
3. 学会等名 大安寺歴史講座Ver. 8 (招待講演)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 山本崇
2. 発表標題 木簡からみた古代兵庫
3. 学会等名 平成30年度兵庫県生活文化大学考古学講座 (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 山本崇
2. 発表標題 山田道の調査と出土木簡
3. 学会等名 木簡学会第39回研究集会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計22件

1. 著者名 山本崇編	4. 発行年 2023年
2. 出版社 私家版	5. 総ページ数 120
3. 書名 呪符木簡集成(稿)(科学研究費補助金基盤研究(C)研究成果報告書)	

1. 著者名 山本崇「日付のある木簡考 木簡からみた古代の休日」(pp.489-504)	4. 発行年 2023年
2. 出版社 奈良文化財研究所	5. 総ページ数 1148
3. 書名 奈良文化財研究所編(共著)『文化財論叢』奈良文化財研究所学報第102冊	

1. 著者名 奈良文化財研究所編(山本崇責任編集)	4. 発行年 2022年
2. 出版社 奈良文化財研究所	5. 総ページ数 224
3. 書名 古代但馬国関係出土文字資料集成(本文編)	

1. 著者名 奈良文化財研究所編(藤間温子責任編集、共著)	4. 発行年 2022年
2. 出版社 奈良文化財研究所	5. 総ページ数 192
3. 書名 古代但馬国関係出土文字資料集成(図版編)	

1. 著者名 山本崇（監修・執筆）「称徳朝の御斎会 宮の中枢空間・大極殿が仏堂へ一変」（pp.40 - 42）	4. 発行年 2022年
2. 出版社 朝日新聞出版	5. 総ページ数 255
3. 書名 朝日新聞出版編（共著）『再現イラストでよみがえる日本史の現場』	

1. 著者名 山本崇（責任編集）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 奈良文化財研究所埋蔵文化財センター発行	5. 総ページ数 127
3. 書名 奈良県出土墨書刻書土器・文字瓦集成 下（埋蔵文化財ニュース第186号）	

1. 著者名 山本崇（責任編集）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 奈良文化財研究所埋蔵文化財センター発行	5. 総ページ数 163
3. 書名 奈良県出土墨書刻書土器・文字瓦集成 上（埋蔵文化財ニュース第185号）	

1. 著者名 山本崇（単著）「袴狭遺跡出土禁制木簡と国司」（pp.383 - 406）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 塙書房	5. 総ページ数 452
3. 書名 山尾幸久編『古代日本の民族・国家・思想』	

1. 著者名 山本崇（単著）「第9講 東漢氏と西文氏」（pp.153 170）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ちくま新書1579	5. 総ページ数 288
3. 書名 佐藤信編（共著）『古代史講義【氏族篇】』	

1. 著者名 奈良文化財研究所編（共著）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 176
3. 書名 木簡 古代からの便り	

1. 著者名 奈良文化財研究所飛鳥資料館編（共著）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 奈良文化財研究所飛鳥資料館	5. 総ページ数 104
3. 書名 『飛鳥 自然と人と』（飛鳥資料館図録第72冊）	

1. 著者名 奈良文化財研究所都城発掘調査部史料研究室編（山本崇責任編集）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 奈良文化財研究所	5. 総ページ数 4
3. 書名 埋もれた大宮びとの横顔 薬・まじない・庄園の木簡	

1. 著者名 奈良文化財研究所編（山本崇責任編集）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 奈良文化財研究所	5. 総ページ数 164
3. 書名 藤原宮木簡四（奈良文化財研究所史料第91冊）	

1. 著者名 浜松市教育委員会（共著）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 浜松市教育委員会	5. 総ページ数 412
3. 書名 梶子遺跡第19・20次（本文編）	

1. 著者名 山本崇（単著）「歴史史料としての日本霊異記」（pp.242 - 273）	4. 発行年 2018年
2. 出版社 竹林舎	5. 総ページ数 544
3. 書名 瀬間正之編『「記紀」の可能性』古代文学と隣接諸科学第10巻	

1. 著者名 山本崇「古代木簡のなかの七世紀木簡」（pp.285 - 313）	4. 発行年 2017年
2. 出版社 竹林舎	5. 総ページ数 560
3. 書名 犬飼隆編『古代の文字文化』古代文学と隣接諸科学第4巻	

1. 著者名 山本崇「第2章 飛鳥・藤原の木簡を紐解く」(pp.39-69)	4. 発行年 2017年
2. 出版社 クバプロ	5. 総ページ数 194
3. 書名 奈良文化財研究所編(共著)『飛鳥・藤原京を読み解く 古代国家誕生の軌跡』	

1. 著者名 本郷真紹監修・駒井匠編集(共著)	4. 発行年 2018年
2. 出版社 法藏館	5. 総ページ数 528
3. 書名 考証日本霊異記 中	

〔産業財産権〕

〔その他〕

山本崇「木簡の古都学33 まじないの意味を探る」(『朝日新聞』週末別冊「be」4面、2018年12月7日)
山本崇「木簡の古都学34 薄板に書かれた「こけら経」」(『朝日新聞』週末別冊「be」4面、2018年12月14日)

6. 研究組織			
	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	中村一郎 (Ichirou Nakamura)		

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	藤間温子 (Fujima Atsuko)		
研究協力者	藤井裕之 (Fujii Hiroyuki)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関